



● NPO法人ホップ  
障害者地域生活支援センター

代表理事 竹田 保

つい先日まで暑い日が続いていたが、いつの間にか手稲山に初雪が舞い空気の冷たさを感じる季節となった。季節の変わり目とともに落ち着いてくると期待していた感染症対策にいまだに振り回され続けている。先が見えない中でも、手さぐりしながら進んでいかなければならないと思う。

拡大により福祉施設でもクラスターが発生している。ある施設では発生以来、泊まり込みを続けていた支援者の疲労度が重なり、最低限の支援体制を維持することが困難となっていた。このため、介護崩壊を避けるため行政からスタッフ派遣の呼びかけに応じて当団体も応援に入った。

職員派遣にあたって、未経験の感染症対応に大きな不安を感じたが、先延ばしすることでのリスクを考え応援を決めた。派遣にあたって、事前の聞き取り、支援現場の確認など調整には極力参加させて頂いたのでスムーズに把握することができた。また、派遣に伴う職員への負担軽減策として、専用宿舎の確保、特別手当、派遣終了後の観察期間など発生時の対処方法を検討する貴重な機会となった。

そんな中、三密回避、マスク着用、手洗い、消毒の実施など基本対策を実施していたが、当団体からも新型コロナウイルス陽性者が発生した。

感染が判明した経緯は、事務室に出入りする職員などへ任意で民間機関の唾液PCR検査を実施したところ、1名の陽性反応が検出された。日々のチェックでは風邪症状もなかったのに、周囲はもちろん本人も相当なショックを受けたようだった。

その日は休日のため職員の多くは休みだったが、ただちに招集し対応策を検討した。検査日を起点として過去5日間の対象者の行動履歴と接触者確認を指示した。同時に保健所と監督機

関へ報告し指示を仰いだら、連絡がとれず、自己判断をせざるを得ない状況も多々あった。対象者は、発熱などの自覚症状が見受けられなかったが、関係機関の判断が確認できるまで他者との接触を避け自室待機、健康観察、保健所への連絡を指示した。

行動履歴から共同住居での業務が判明し、施設全体を隔離し、感染危険区域、感染注意区域、安全区域の3ゾーンに区分けし、入居者の自室待機、担当支援者の選任、施設全体の消毒、感染予防防具の手配調達などの業務を一気にこなす必要に迫られた。また、感染拡大を避けるための接触対応などクラスター支援経験が活かされたと思う。また、関係者から多くの感染防御具を支援頂いたため適切な対応を行うことができた。

保健所からの助言で、検査結果確定日から一定期間過去に遡り、-5日を発症日として決め、対面での会話、身体接触、食事トイレ移乗介助、10分程度の接近した状態での会話有無などの調査を行い、感染疑いの洗い出しを行った。

幸いにして感染疑い者からは体調不良など不調は発見されなかったが、感染した場合のハイリスクや支援者が無症状感染者である可能性からPCR検査を実施して頂き、関係者全員の陰性結果を確認することができた。判明後も保健所や関係機関とは毎日連絡を取り合い様々な助言を受けた。

微量ウイルスの残存による隠れ感染への対応として、14日間の経過観察期間を経てから段階的に対応策を軽減した。

最後に、昼夜にわたって支援頂いた、札幌市障がい福祉課、保健所など多くの関係者の皆様へ感謝申し上げますとともに、ご迷惑をお掛けした皆様にお詫び申し上げます。

今回の件では、感染情報公開、ストレス緩和、フォローアップ体制、連携不足など反省点も多い。特に、待機期間中の職員に対するメンタルサポート、補償や単身障害者や同居家族が感染した場合の支援、情報共有、コロナウイルス感染症対策や防護具の着脱等の講義・実演指導の研修、応援スタッフ派遣など地域の支援ネットワークの形成が必要だと思う。